

短 報

2014 年度 WHOCC 看護・助産グローバルネットワーク 学術集会・総会への参加報告

—ポルトガルでの開催—

高橋 恵子¹⁾ 有森 直子¹⁾ 田代 順子²⁾

Congress Attendance Report for WHOCC Nursing and Midwifery Global Network Scientific and General Meetings 2014 in Portugal

Keiko TAKAHASHI, RN, Ph.D¹⁾ Naoko ARIMORI, CMN, RN, Ph.D¹⁾ Junko TASHIRO, RN, Ph.D²⁾

[Abstract]

This year is the 3rd year of the 6th year term that St Luke's International University was designated as a WHO Collaborating Center (WHOCC) for Nursing and Midwifery Development in Primary Health Care that began in 1990.

To establish a world-wide collaborative research system, our WHOCC secretariat members attended the general meeting of Global Network of WHO Collaborating Centers for Nursing and Midwifery 2014 held in Portugal, and exchanged information and experiences with the members from each attending country. We also reported our activities of the People-Centered Care Research Department at Research Center for Development of Nursing Practice in the scientific meeting that was held ahead of the general meeting.

Our university's role, as Japan's base for WHO in Nursing, transmits WHO's information to nursing in Japan, and at the same time, distributes research achievements from Japan to overseas members. Given the environment of strengthening 'globalization' at St. Luke's International University, we need to strategically prepare and plan for this exchange for the 7th term of the WHO Collaborating Center of Japan.

[Key words] World Health Organization (WHO), nursing and midwifery, global network, People-Centered Care

[要 旨]

聖路加国際大学は、1990年に看護・助産の分野における Primary Health Care の研究協力機関として、World Health Organization Collaborating Center (以下: WHOCC) に任命され、現在6期目を迎えている。今回、本学 WHO 研究協力センター事務局のメンバーが、世界規模の研究協力基盤を形成する目的で、2014年7月にポルトガルで開催された The Global Network of WHO Collaborating Centers for Nursing and Midwifery (WHOCC 看護・助産グローバルネットワーク) の総会に参加し、各国の WHO 研究協力センター事務局メンバーと交流を行った。また、総会に先立ち開催された学術集会にも参加し、本学 WHO 研究協力センター事務局 (本学研究センター-PCC 実践開発研究部) の活動実績を発表した。これま

1) 聖路加国際大学 研究センター-PCC 実践開発研究部 St. Luke's International University, Research Center, PCC Development of Practice
2) 聖路加国際大学 国際部 St. Luke's International University, International Affairs Department

で、本学は日本における WHO の看護分野の拠点として、WHO の情報を国内に伝え、研究成果を海外に発信する使命を担ってきた。今後は「聖路加国際大学」としての「国際性」がより強化される中で、7 期目の委嘱に向けて計画的に申請の準備を整える必要がある。

〔キーワード〕 World Health Organization (WHO), 看護・助産, グローバル・ネットワーク, People-Centered Care

I. はじめに

聖路加国際大学（以下：本学）は、1990年5月に世界保健機関研究協力センター（World Health Organization Collaborating Center：WHOCC）に任命されてから、2014年で6期（2012 - 2016）目の3年目を迎えた¹⁾。WHOCCとは、大学などの研究機関が世界保健機関（World Health Organization：WHO）のプログラムの遂行活動を支援するために、国際協力ネットワークの部局として、WHOの事務局長より任命された機関である。WHOには、看護・助産、世界環境、産業保健など様々な分野があり、本学は、看護・助産の分野における「Primary Health Care」の看護開発の研究協力センターとして指定を受けている²⁾。また、WHOは、世界を6地区（西太平洋、アメリカ、東南アジア地域、東地中海、ヨーロッパ、アフリカ）に分け、それぞれに地域事務局がある。本学は、西太平洋地域（Weston Pacific Regional Office：WPRO）に所属している。本学が所属するWPROには、香港（The Hong Kong Polytechnic University）、オーストラリア（University of Technology Sydney James Cook University）、韓国（Yonsei University）、中国（Peking Union Medical College）、タイ（Mahidol University, Chiang Mai University）、フィリピン（University of Philippines）、日本（聖路加国際大学、兵庫県立大学）の7カ国がWHOCCに属している。

WHOでは、Primary Health Care、そしてHealth Promotionさらに、People Centered Health Careへと、Health for ALLを目指した戦略を提言してきた。そのような流れのなか、本学では、研究センターPCC実践開発研究部にWHO研究協力センターの事務局を置き、21世紀COEプログラムで築き上げたPeople-Centered Care（市民主導の健康生成をめざすケア：PCC）³⁾を基軸に研究開発および実践する役割を担い、WHOCC活動の国内外の発信、WHO本部およびWPROからの情報収集、学内および国内関連機関との共有、看護・助産の分野におけるWHOCCへの参与と連携を行っている。

そのような中、本学WHOCC事務局メンバーの3名が、世界規模の研究協力基盤を形成する目的で、2014年7月28・29日にポルトガル・コインブラ州で開催されたThe Global Network of WHO Collaborating Cen-

表1 学術集会・総会の開催日程

日程	内容
2014年 7月23日(水)~25日(金)	WHOCC看護・助産グローバルネットワーク学術集会
28日(月)~29日(火)	WHOCC看護・助産グローバルネットワーク総会

ters for Nursing and Midwifery（WHOCC看護・助産グローバルネットワーク）の総会に参加し、各国のWHOCC事務局メンバーとの交流を行った。また、総会に先立ち7月23日~25日に開催されたWHOCC看護・助産グローバルネットワークの第10回学術集会にも参加し、本学WHOCC事務局（本学研究センターPCC実践開発研究部）の活動実績を発表した。

そこで、本稿では、出席したWHOCC看護・助産グローバルネットワーク学術集会と総会の概要を報告する。

II. WHOCC看護・助産グローバルネットワーク学術集会への参加

WHOCC看護・助産グローバルネットワーク第10回学術集会が、7月23日~25日の3日間、ポルトガルのコインブラ州（コインブラ看護大学）で開催された。本学からは、有森直子教授（PCC実践開発研究部部長）と、田代順子教授（国際部部長）、高橋恵子准教授（PCC実践開発研究部専任研究員）の3名が本学WHOCC事務局を代表し参加した。学術集会会場のコインブラへは、日本から飛行機でパリを経由してリスボンに到着し、さらにそこから鉄道で約2時間かけてコインブラ駅に到着する。会場のコインブラ看護大学までは、コインブラ駅から車で急な坂道を10分ほど走らせた高台にある。日本からは、片道だけで丸1日かかる場所であった。コインブラ大学が、今期新たにWHOCCに任命されたこともあり、第10回学術集会がこの地で開催された。

私たちは、学術集会初日の7月23日のシンポジウムから参加した。午後は、開催会場であったコインブラ大学病院の一般病棟、産科や保健センターなどを選択し見学することができ、私たちはそれぞれ関心を持った施設を訪問した。ポルトガルでも、賃金の高いEuropean Union (EU)の国へ看護師が移動するために、看護師不足が問題になっていた。7月24日のシンポジウムに

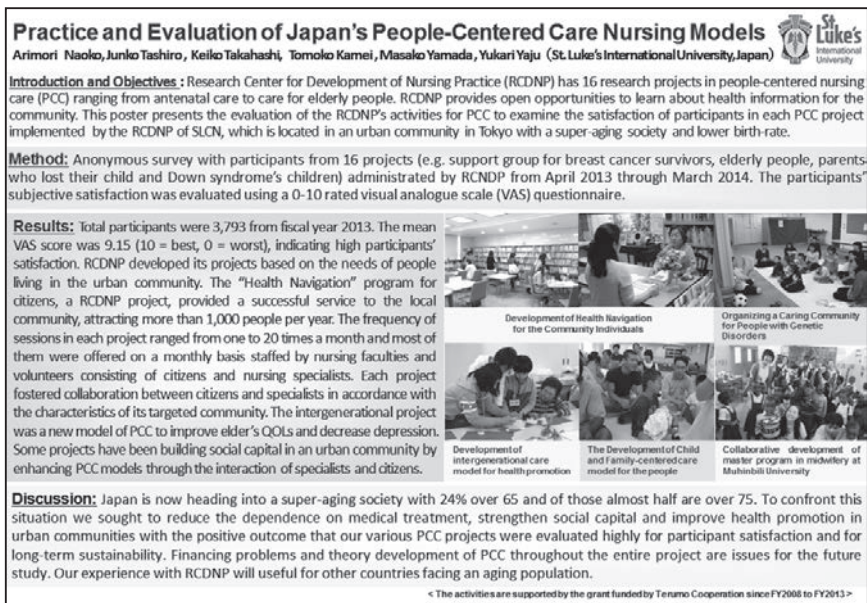


図1 学術集会で発表したポスター

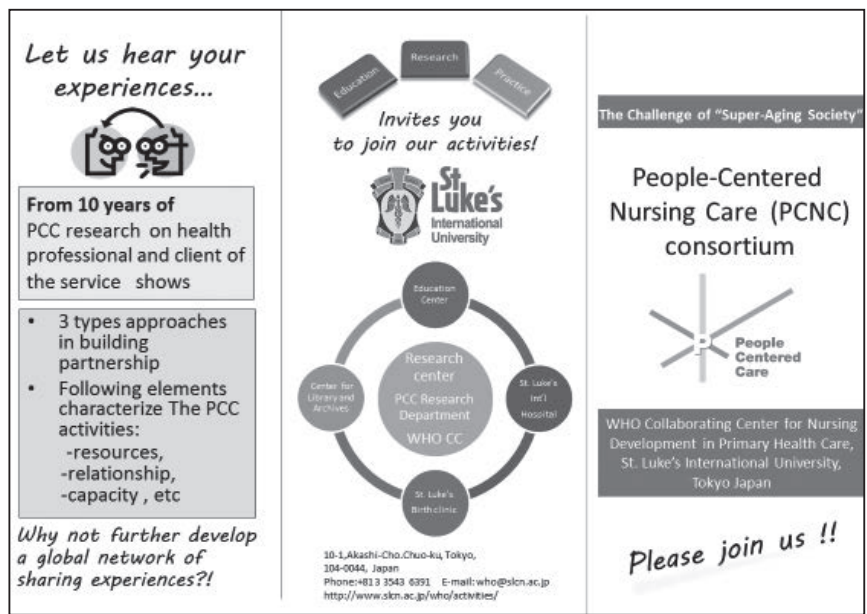


図2 国際共同研究を目的にしたコンソーシアムの呼びかけチラシ

は、看護・助産研究協力センターの役割とミレニアムの戦略をテーマに WHOCC 看護・助産グローバルネットワークの事務局であるサンパウロ大学（ブラジル）の Isabel による講演が行われた。翌日7月25日には、私たちが“Practice and Evaluation of Japan's People-Centered Care Nursing Models（日本における PCC 看護モデルの実践と評価）”の演題で、現在活動している 16 の PCC 事業紹介と利用者の高い満足度評価についてポスター発表（図1）をした。会場では、特に、他の国よりも先じて超高齢社会を迎える日本における PCC Nursing Models の海外での汎用性について国際的共同研究

として進めるコンソーシアムの呼びかけ（図2）を行った。質問には、事業活動で行っている Health Navigation についての質問や、事業評価として活用した Visual Analog Scale（VAS）の満足度の質問項目について、満足の詳細な意見はないのかといったフロアーからの質問が活発に行われた。掲載されたポスター前での発表やディスカッションといった日本でよくみられるポスター発表の形式とは異なり、発表時間にプロジェクターで映写されたポスターの前で、1 演題ごとに会場の前に出て発表するもので、口頭発表とほぼ同様の形式であった。私たちが発表した会場では 15 の演題が発表された。そ

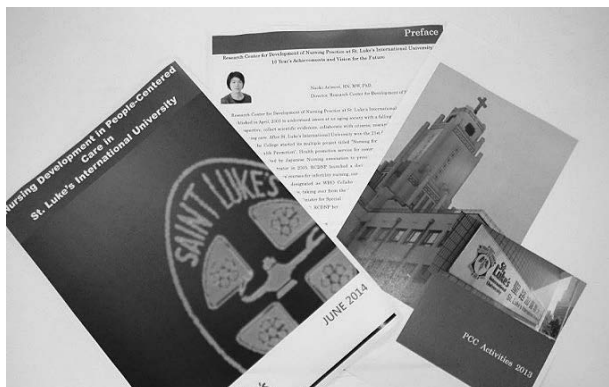


写真1 聖路加国際大学 WHOCC 活動報告書 (2014)

のうち、英語で発表した演題は、私たち日本と韓国からの発表者のみのわずか2演題のみであり、演者の多くが母国語（ポルトガル語）による発表であった。同学術集会でエントリーされた演題数は、総計700演題以上を超えたボリュームで、他の会場でも大半がポルトガル語による発表であった。26日のクロージングでは、聖路加国際大学を含む WHOCC の紹介 DVD が大ホール会場で披露された。また今回学術集会に出席した世界各国が紹介され、日本の紹介の際には、私たち3名が会場内で立ち上がり周囲に一礼をした。今回の同学術集会の総参加数は、計2,000人と大盛況であった。

当日の運営スタッフは、コインブラ看護大学の教職員、学生が紫色の学術集会のお揃いのTシャツを着て笑顔で丁寧に対応してくれた。

Ⅲ. WHOCC 看護・助産グローバル・ネットワーク総会の報告

2年毎の WHOCC 看護・助産グローバル・ネットワーク総会は、2014年7月28・29日の2日間の期間に、ポルトガルのコインブラ看護大学で、WHO本部、各地区の看護アドバイザー、そして各センター代表が参加して開催された。これまで WHOCC 看護・助産グローバル・ネットワークの事務局代表は、ブラジルのサンパウロ大学が担っており、この2日間の総会の議長を務めた。看護・助産グローバル・ネットワークを構成している WHO 看護開発協力センターは世界に43カ所あり、日本では、兵庫県立大学と聖路加国際大学の2カ所が該当する。総会は、各センターのPRと情報交換の場であり、各センターのロゴ入りのグッズや冊子が配布され、本学からも2014年度版の活動報告書を配布した(写真1)。

本総会には大きな焦点が4点あり、第1に、総会の趣旨でもあった、WHO本部の看護・助産開発協力グローバル・ポリシーと各地区の活動の確認と、次の2年間の看護・助産開発の活動計画を行うこと、第2に、サンパウロ大学からシドニー工科大学（オーストラリア）への



写真2 総会に参加した WPRO メンバー (日本、香港、韓国、中国、オーストラリア)

写真3 現 WHOCC 事務局 (Dr. Isabel: ブラジル) と次期事務局 (Dr. John: オーストラリア)
※左端田代、右から2番目有森、右端高橋

事務局移行の式典、第3に、WHOCC 看護・助産グローバル・ネットワーク創設25周年記念、第4に、イペリア半島初の看護開発協力センターとして、コインブラ看護大学が任命された祝典が挙げられる。

第1の焦点では、WHO本部から、2015年までのミレニアム開発目標（以下：MDGs）の達成を評価し、ポストMDGsのWHO枠組みとなるグローバル・ポリシー、「Universal Health Coverage（以下：UHC）」の確認がなされた。UHCは、これまでのポリシーを含むすべての人々が基礎的保健医療サービスにアクセスできる総合的なシステム構築の枠組みであった²⁾。このUHCにおける看護・助産職の働き方に関する情報提供がなされた。

第2の焦点として、2008年から6年間、WHOCC 看護・助産グローバル・ネットワークの事務局であったブラジルのサンパウロ大学から、オーストラリアのシドニー工科大学へ、事務局を移行する式が行われた。第3に、プライマリーヘルスケア（PHC）を推進するためには、看護・助産を強化することが重要であるというWHO総会での勧告により、看護・助産強化のための研究を推進できる看護・助産開発センターが任命され、その母体としてWHOCC看護・助産グローバル・ネットワークが1988年に創立され、今年で25周年を迎えた。

25年間で看護開発協力センター数は43センターとなり、各地区間には、センター数に差があるものの、各地区の看護・助産開発研究を実施できるセンターが増加してきた。このことは、看護・助産開発が研究機能をもつ高等教育機関が増加したことを示している。日本においても、1990年に1センターが任命され、現在は、兵庫県立大学と本学の2センターとなっている。

第4に、ヨーロッパにおいては、大学教育の歴史は古いものの、看護教育の高等教育機関への移行は遅れ、看護・助産開発センターの数は限られている現状である。今回、ポルトガルに看護・開発センターができたことは、ポルトガル語圏の看護・助産研究、ひいては高等教育化への発展の表れと考えられる。

IV. おわりに

WHOCC 看護・助産グローバル・ネットワークが開設して、25周年という節目にあたる大会であった。総会では、25年の歴史を振り返るプログラムもあり、本学 WHOCC 事務局からは田代順子もスピーチを行った。現在、健康課題に果たす看護の役割は、研究の成果として他の領域や WHO 本部に十分には浸透しているとは言いがたい。今後は WHO 本部の方針を受けて WHOCC 看護・助産グローバル・ネットワークとして、各地域 (Regional) の中で果たす役割と、健康課題別のネットワークを使い分けていくことが求められる。

これまで、本学は日本における WHO の看護分野の拠

点として、WHO の情報を国内に伝え、研究成果を海外に発信する使命を担ってきた。「聖路加国際大学」としての「国際性」がより強化される中で、次期の委嘱に向けて計画的に申請の準備を整える必要がある。

謝 辞

ポルトガルでの発表・参加に向けてサポート下さった本学 WHOCC 事務局メンバーの亀井智子先生、新福洋子先生、中島薫氏、さらに事前調整からご協力いただいた国際部の瓜生田真理氏に深く感謝申し上げます。

なお、本活動報告の一部を、日本看護協会出版会『看護』連載「WHO NEWS」の11月号(2014年)にて発表した。

引用文献

- 1) 南裕子. (2010). WHO プライマリーヘルスケア 看護開発協力センター開所時を振り返って、WHO プライマリーヘルスケア看護開発協力センター20年の軌跡, 聖路加看護大学, 15-23.
- 2) 厚生労働統計協会. (2014). 世界保健機関, 国民衛生の動向・厚生指標, 61(9), 46-48.
- 3) 小松浩子. (2008). 市民主導の健康生成をめざす看護形成拠点 People-Centered Care の創生, 聖路加看護大学 21世紀 COE プログラム市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点 研究成果最終報告書, 聖路加看護大学 21世紀 COE プログラム運営事務局, 6-11.